

競進組・競進社の結成



競進社伝習所（明治17年頃）



競進社蚕業学校（明治後期）

群馬県の高山長五郎は「清温育」という清涼育と温暖育の折衷飼育法を編み出し、埼玉県の木村九蔵も高山長五郎と協力して同様に「一派温暖育」という新しい飼育法を発表し世間より注目を浴びた。二人はその飼育法を広く普及させるために、明治10年(1877)に養蚕改良高山組と養蚕改良競進組という養蚕改良結社をそれぞれ組織して、養蚕の飼育指導にあたった。両社の評判は瞬く間に広がり、日本各地から両組で学ぼうとする者が続出した。両組とも多くの希望者を受け入れるために組織を拡張し、競進組は明治17年(1884)に児玉町に伝習所と事務所を設置して養蚕改良競進社となった。



競進社と競進社実業学校全景（昭和初期）



競進社実業学校正門付近（昭和初期）

競進社は正式には養蚕改良競進社といい、社長の木村九蔵を中心に周辺の養蚕農家の若者たちが集まって結成した養蚕改良普及結社である。

江戸時代末期、幕府は長く続いた鎖国政策を止めて開国に踏み切った。横浜が外国貿易の窓口となり、ここより国産の生糸や蚕種が高い値段で取引され輸出された。そのため日本各地で養蚕業が盛んとなるが、当時の養蚕は年に一回の飼育であり、飼育方法も天然育という自然のままの飼育方法が一般的であり、繭の増産には問題が多く、早急な養蚕の改良飼育が求められた。そんな中で上州島村の大蚕種業者の田島弥平は「清涼育」という換気に重点を置いた飼育法を発表し世間より認められ各地に普及した。それ以降も養蚕の改良は各地で盛んに研究された。



伝習風景



昭和初期の競進社

競進社は児玉郡内に分教場を設置し、さらに県内各地から県外各地に競進社支部を多数設置して競進社流の飼育指導を行い、各地からの要望にも応えて教授員の派遣を積極的に行っている。

その後、競進社伝習所は明治30年(1897)に実技指導に学科を加えた教育機関となり、競進社蚕業講究所となった。明治32年(1899)になると実業学校令が公布され、これにより競進社蚕業講究所は競進社養蚕改良組合立競進社蚕業学校となった。その後、大正14年(1925)には校名を競進社実業学校と改称し、さらに児玉農学校を経て、戦後の昭和23年に新制の高等学校となり児玉農業高等学校となった。昭和47年に至り県立移管され、埼玉県立児玉農工高等学校となった。平成7年に校名を児玉白楊高等学校と改め現在に至っている。

